聖　書：Ⅰサムエル 17：37b～58
説教題：万軍の主の御名によって
日　時：2016 年 10 月 9 日（夕拝）

今日は 17 章後半、いよいよダビデとゴリヤテの戦いの場面を見ます。ダビデは 32 節でサウルに「このしもべが行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」と申し出ますが、サウルから「あなたはまだ若いから無理だ」とたしなめられます。しかしそれでもなお願い出るダビデの言葉を聞いて、サウルはついに承認し、彼に自分のよろいかぶとを着させます。しかしダビデにそれは合わなかったようです。サウルはイスラエルの中で誰よりも肩から上だけ背が高いと言われた人。一方のダビデはまだ兵役につく以前の少年です。きっとぶかぶかだったのでしょう。それに慣れていないそんな格好では歩くこともままならない。そこでダビデが戦いの武器として手に取ったのは、40 節にある通り、羊飼いをする時に使っていた杖と、川から拾って来た 5 つのなめらかな石、それを入れる袋、そしてその石を飛ばすための石投げでした。果たしてこれでどうやって巨人ゴリヤテと戦うことができるのでしょうか。

その戦いの様子が 41 節から記されます。ゴリヤテは盾持ちを先頭にしてじりじりと進んで来ましたが、敵を見下ろして拍子抜けします。どんな戦士がやって来るかと思いきや、相手は何の武装もしていない紅顔の美少年。しかも手に杖を持って戦おうとしています。ゴリヤテは「おれは犬なのか。杖を持って向かって来るが。」と笑い飛ばします。そして「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」と言います。対するダビデもひるむことなく「私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から切り離し、きょう、ペリシテ人の陣営のしかばねを、空の鳥、地の獣に与える。」と言います。両者がそれぞれ走り寄り、相手を倒さんと向います。先制攻撃をしたのはダビデ。投石袋から石を一つ取り、石投げでそれを放ちました。すると何とその石はゴリヤテが武装したよろいかぶとの隙間を縫うようにして彼の額に命中します。そして次の瞬間、ゴリヤテは地面にうつぶせに倒れます。ゴング開始早々のノックアウト。あまりにもあっけない結末でした。

このダビデとゴリヤテの話は、私が小さい時から教会学校などでよく聞かされ、知っていた話ですが、長い間、今一歩素直に納得できないところがありました。ダビデとゴリヤテがそれなりに互いに組んで、少しはチャンバラをやった後、神の奇跡的な力と助

けによってダビデが勝ったというのなら良いのですが、まだお互いが十分に近づかない内に遠くから石を飛ばして勝つというのは正々堂々としたやり方でないのではないか。それはやや卑怯でずるい方法ではないかと思ったのです。小学生の頃、私も人並みに取っ組み合いの喧嘩をしましたが、よく「ものを使ってはだめ」と言われました。そばにある筆箱とか棒などを使って喧嘩をすると大怪我をしやすい。やるなら素手でやるべきだ。遠くから石を投げるなんてもってのほかであると教えられていたことと関係していたかもしれません。しかしある時、このダビデの勝利の仕方には素晴らしい慰めのメッセージがあることが分かったのです。

このダビデの戦いが私たちに示している真理は何でしょうか。それはまず、この戦いは「剣や槍を使わずに」というものであったことです。この章ここまで強調されて来たのは、ゴリヤテの巨大な体格と共にその重装備でしょう。前回見た 5〜7 節には見る者を圧倒せずにいないゴリヤテの様子とその武具が記されていました。このような装備をしている相手にはとても勝てないように思います。万一勝つには相手と同じ武具か、それ以上のもの持たなくてはならない。そういうものを持ち合わせていない自分には到底勝ち目はないと考える。私たちも様々な課題や困難を前にして、自分にはそれらに勝つための道具がそろっていないと考えがちです。あれもないし、これも足りない。こんな状態ではとても勝ち得ないと。しかしダビデの戦いは「剣や槍を使わずに」でした。

ではダビデがより頼んだものは何だったのでしょう。それは「万軍の主の御名によって」(45 節)ということです。「御名」とは神ご自身と同じことですから、これは「主ご自身により頼んで」ということです。私たちは唯一まことの神がいることを知り、そのことを告白しています。その方は世界の創造者であり、また歴史一切を御手に治めて導いておられる摂理の神。全能者で絶対主権を持つお方です。しかし私たちは様々な困難を前にすると、普段口では告白しているこの真理がどこかに飛んで行ってしまう。そして私たちが一生懸命にすることは、この神様抜きで、この神様がいなくても大丈夫であるように自分の生活を自分で整えようとすることではないでしょうか。そしてその結果、良い見通しが持てないと意気消沈する。ゴリヤテを前にうなだれてしまう。しかしこのダビデから教えられることは、私たちはそのような中でもまず万軍の主を見上げる生活に召されているということです。この方抜きで自分の生活を考えるのではなく、この方がここにおられることを何よりも大切な事実としてしっかり見つめ、そのことを計算に入れて、もう一度目の前の状況を信仰の目で見つめ直す。ダビデはそのようにしたので

す。その方を仰ぎ、その方に信頼して、勇気と力を得て、自分のなすべきわざへと向かって行ったのです。

そしてもう一つ、このダビデの戦いに示されていることは、主の力は私たちの弱さを通して働くということです。このダビデとゴリヤテの戦いの特徴は、何と言ってもダビデが石ころ一つで大巨人ゴリヤテに勝ったことでしょう。石を投げて勝つなんて、やり方が少々ずるいのでは？と以前の私は思いましたが、ここはそういう意味ではありません。むしろメッセージはその反対です。すなわち主に信頼して事に当たるなら、石ころのようなものさえも主に用いられて我々は勝利するということです。ダビデが手にしていた石ころは、ゴリヤテが手にしていた青銅製の投げ槍に比べればお話にならないものだったでしょう。それはおもちゃ同然であり、弱さの象徴だったでしょう。しかし実にその石ころが大巨人ゴリヤテを倒したのです！武器としてはこの世では蔑まれるであろう小さな石が、神の摂理によってゴリヤテの額へとまっすぐ飛んで行き、力強くその急所を打ち、まさかの勝利を収めたのです。これは私たちに大きな希望を与えるメッセージではないでしょうか。私たちも様々な課題を前にして無力感を覚えます。怪物ゴリヤテを前にして、なす術がないと感じます。しかしここに示されていることは、なす術が何もないのではない。立派な武器がなければ勝てないわけではない。ゴリヤテと戦うためには石ころで十分なのです。石ころなら、その辺にいくらでも転がっているでしょう。誰もそんなものには目を留めませんから、いくらでも拾って来ることができます。そういうものがあれば十分なのです。あるいはこれを自分自身にたとえても良いと思います。自分には特別な能力はない。取り立ててすぐれた性質を持っているわけでもない。まさにその辺に転がっている石ころのようなものかもしれません。しかしそんな石ころによって神はゴリヤテへの勝利を導いてくださる。私たちはⅡコリント 12 章のパウロの言葉を思い起こすでしょう。主の力は私たちの弱さの内に完全に現れる。私たちは弱くてもいいのです。いや私たちが弱い時にこそ私たちは強いのです。そこに神の栄光が現わされるのです。ですから私たちは主に信頼して、貧しい自分、石ころの自分をささげればいいのです。主はそれを用いてまさかの導きを私たちに与えてくださるのです。

最後にまとめとして 2 つのことを述べたいと思います。その一つは私たちはこの箇所を、ダビデの姿から自分の戦いにどう当てはめられるかという観点から読みやすいのですが、その前にここにはもっと根本的なメッセージがあるということです。それは、このダビデとゴリヤテの戦いは、神が私たちのために立ててくださるまことの王の勝利を

描いているものであるということです。最初の王サウルが失敗に終わって、神はご自身の心にかなうダビデを王として備えてくださいました。その彼がここで強敵の怪物ゴリヤテに勝ちました。これは神がやがて送ってくださるまことの王イエス・キリストのみわざをあらかじめ指し示すストーリーとしての意味を持っています。神が立てる王はこうしてやがて悪に勝利し、神の民に勝利の祝福をもたらしてくださる。この勝利を見て、52 節でイスラエルの民はときの声を上げます。勝利の雄叫びです。救いの喜びの声です。キリストはここに示されている通り、私たちの真の敵に勝ってくださいました。最大の敵を倒してくださいました。その勝利を見て私たちは感謝の声を上げるのです。これはキリストにある民の喜びを指し示しているものなのです。ヨハネの黙示録 12 章 9〜10 節：「こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。『今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟の告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えているものが投げ落とされたからである。』」

そしてもう一つのことは、この方のもとで私たちはなお戦うように召されているということです。キリストは地上の生涯と十字架と復活によって、すでにサタンに対して決定的勝利を勝ち取ってくださいました。とはいえ、歴史の最後の日までは戦いが残っています。サタンは死に物狂いで私たちを恵みから落とそうと攻撃して来ます。それは決して侮ることができないもの、リアルなものとして新約聖書で言われています。そういう中で私たちはどのように戦うのでしょうか。今日の箇所から学ぶことは、私たちも万軍の主の御名によって戦うということです。私たちが見上げる神は、すでにキリストを送ってくださり、根本的勝利をもたらしてくださっています。そのことを信じて戦うのです。私たち一人一人がどんなに弱くても、「わたしの恵みはあなたに十分である」と言われる私たちの王、主イエスを仰ぎ、「私は弱い時にこそ強い」と告白して戦うことです。私たちはどんな課題や困難を前にしても、肉の目で見えるところだけで判断せず、まず万軍の主なる神を見上げ、その神がすでに遣わしてくださった王の王に信頼して戦いたいと思います。その王は決定的勝利をすでに勝ち取ってくださっています。ローマ書 8 章 37 節：「私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的勝利者となるのです。」　そのことを告白して様々な戦いの中で主の恵みを祈り求め、私たちの信仰の戦いを勇敢に戦いたいと思います。そして私たちの信仰の歩みの一切をもって、万軍の主の御名に栄光を帰す神の民の歩みへ導かれて

行きたいと思います。